



[茅の輪と狛犬〈栄田神社〉](#)

貴方が一番最近神社に参拝したのはいつでしたか？

今年の初詣？ それとも・・・

新型コロナウイルスの緊急事態宣言が令和2年5月25日に解除された後にも、日々新しい感染者がカウントされ続けています。

それにしてもコロナウイルス拡大以後、私たちの日常が目に見えないもので大きく影響されていることに、気づかされるようになったのではないのでしょうか。

コロナストレスは病原ウイルスそのものより、目に見えない故の恐怖感・苛立ち・怒り・不安などのいろいろな感情が渦巻いているのが今の私たちではないのでしょうか。

そんな、目に見えないもので囚われた私たちの心を癒してくれるものの一つに“祈り”があるのではないのでしょうか。

現代に生きる私たちは「新型コロナウイルス」に翻弄されているわけですが、決して今に始まったことではなく、何世代にも渡って私たちのご先祖様も、疫病や災害などの同じ苦しみを克服して、子孫にその命をつなぎ今の私たちが生かされているのです。

感謝以外にありませんね。

奥田昌子著『日本人の病気と食の歴史』（ベストセラーズ刊）によりますと、「結核」は弥生時代に稲作とともに日本に渡来し、古墳時代までに日本に根つき、今でも私たちに脅かしているとのこと。また、奈良時代を中心とする100年間には疫病が約40回発生したとされ、735年に始まった「天然痘ウイルス」の流行も、大陸からの人の移動に伴うものと考えられているとのこと。

今の「新型コロナウイルス」と同じですね。

感染の拡大を食い止めようと、数百人規模の僧が宮中で読経し、ときの聖武天皇は大赦（おおはらい）を行い、さらには東大寺に大仏を建立するなど思いつく限りの手を打ったそうです。

疫病を鎮める為に宮中で行われていた儀式の中には、のちに庶民に広がり、形を変えて現代に伝わるものがあります。

その一つに「茅の輪（ちのわ）くぐり」が挙げられます。

「茅の輪くぐり」は、毎年6月30日に神社で行われる「夏越の祓（なごしのはらえ）」で催行される神事です。

本殿の正面に茅（かや）で編んだ直径3～4m程の輪を立て、まず正面から最初に左回り、次に右回りと8の字を描いて計3回くぐることで、心身を清めて厄災を払い、無病息災を願うという儀式です。

こちら焼津市下小田の栄田神社では、毎年6月半ばの日曜日に神社総代と顧問の有志が大井川の河口に茂っている茅を伐採しに行く事から神事が始まります。



[大井川河口の茅を刈ります](#)



[茅をベースの輪に縛り始めます](#)

「地域の先輩総代から伝授した作法や思いを後輩へと継げていきたい」と、この神事に使われる「茅の輪作り」を長年指導していらっしゃるのは、作り続けて10年の橋ヶ谷勝彦さん(75歳)です。



この紐も藁から手作りします



完成した茅の輪を竹杵に《後ろ姿が橋ヶ谷勝彦氏》

「自分は米を作ったり船乗りもしていたので、常に神さんに守られていたように思うけど、今の氏子さんたちにはその実感を持ってないのか、神社に対する畏敬の念の希薄さを感じられる」とも仰る橋ヶ谷さんは、長年の功績により静岡県神社庁より功労表彰されました。



取付の最後の見せ場です



茅の輪の取付完了です

今年も、全国津々浦々の神社で「夏越の祓(なごしのはらえ)」が執り行われます。「茅の輪くぐり」の神事は氏子だけでなく、どなたでも自由に参加できますのでぜひお近くの神社にてお参り下さい。

志太地区では、焼津神社・熊野神社・栄田神社・飽波(あくなみ)神社・神(みわ)神社・大井神社などで催行されます。しかし、今年は例年のような賑わいの中で行われる祭りではないので、「新型コロナウイルス退散」を心から願い、マスク着用で、三密のルールを守って厳かにご参拝ください。

島田市の大井神社様のご厚意により、昨年までの「茅の輪くぐり」のスナップ写真を載せさせていただきます。





[「お兄ちゃんと手をつないでくろうね」](#)



[昼間から大勢の参拝者です](#)



[島田の初夏の風物詩です](#)



[来年こそこんな賑わいが戻りますように](#)

医療関係従事者の皆様はじめ「新型コロナウイルス鎮静」のために、日夜問わず働いて下さっている皆様、どうぞご自愛くださいませ。

心から御礼申し上げます。ありがとうございます。

合掌

取材：志太・榛北地区担当 生きがい特派員 宮島克実

参考書籍

奥田昌子著『日本人の病気と食の歴史』（ベストセラーズ刊）